



TITLE:

Visualizing variations in organizational safety culture across an inter-hospital multifaceted workforce(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Kobuse, Hiroe

CITATION:

Kobuse, Hiroe. Visualizing variations in organizational safety culture across an inter-hospital multifaceted workforce. 京都大学, 2016, 博士(社会健康医学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13004>

RIGHT:

京都大学	博士（社会健康医学）	氏 名	小 伏 寛 枝
論文題目	Visualizing variations in organizational safety culture across an inter-hospital multifaceted workforce (病院の多様な組織間での安全文化のばらつきの可視化)		
(論文内容の要旨)			
<p><u>背景・目的</u> 病院の安全に対する組織文化（安全文化）は、医療安全確保の観点から関心を集めてきた。病院は複雑なモザイク状の組織構成となっているため、病院の安全文化は、病院毎の違いだけでなく、病院内のサブグループ（職種、職位、部署）毎の違いにも着目されるべきである。しかしながら、病院安全文化の評価尺度に関する先行研究では、各レベルでの組織間のパターンの違いを識別できるかを検証したものが、米国医療品質研究調査機構（AHRQ）開発の質問票を除いては見当たらない。本研究では、病院間だけでなく、職種・職位・部署等のサブグループ間の安全文化の違いに対する識別力を持つ「病院安全文化の評価尺度」を開発することを目的とした。</p> <p><u>方法</u> 62の先行研究の内容分析を経て、8軸（協力、情報共有、専門職としての成長、士気、共通の価値感、資源配分の優先度、責任と権限、改善志向）の病院安全文化の概念的枠組みを設定した。これらの多様な軸に関する多数の質問項目をレビューし、病院の安全確保に関連した分かりやすい66項目へと修正した。医師・看護師・他の医療従事者・事務職員から、項目への意見を聴取し、さらにグループディスカッションをおこなうことで内容妥当性を確認し、25項目へと集約した。30人以上の医師・看護師・他の医療従事者・事務職員に対するパイロット調査を経て、6公立病院の医師・看護師・他の医療従事者・事務職員を対象とした安全文化調査を実施した。質問票の妥当性は、①構成概念妥当性（因子的妥当性、収束的妥当性、弁別的妥当性）②基準関連妥当性（「職員が評価した安全の達成度」を目的変数とした重回帰分析により確認）を確認した。信頼性は内的整合性を確認した。安全文化の違いを識別する力は、「各評価軸のスコアの変動係数」と「四分位範囲を平均値で除した値（IQR／AVE）」を用い、病院間・職種間・職位間・部署間での違いを把握できるか確認した。</p> <p><u>結果・考察</u> 調査表を配布した3,304人の病院職員のうち、2,924人から回答（回答率88.5％）を得た。探索的因子分析の結果から、安全文化を評価する質問票は8軸（改善志向、使命に対する熱意、専門職としての成長、資源配分の優先度、部門間連携、責任と権限、チームワーク、情報共有）24項目とした。多特性多方法行列分析で構成概念妥当性を、クロンバックα係数で内的整合性を有することを確認した。重回帰分析では、目的変数である「職員が評価した安全の達成度」と「改善志向」「使命に対する熱意」「資源配分の優先度」「情報共有」の4つの従属変数が有意に関連していることが示された。病院間・職種間・職位間・部署間の各スコアの変動係数とIQR／AVEの結果から、本質問票の安全文化の違いに対する識別力が確認できた。安全文化の評価に、①「病院レベルのトピック」と「個人／部署レベルのトピック」を含めた点、②「トップダウンの活動」と「ボトムアップの活動」の双方を含めている点、③「継続的なデータ</p>			

<p>収集・分析」を継続的改善の評価指標として加えた点は、本質問票の特徴的な点である。</p> <p><u>結論</u> 本研究で開発した質問票は、妥当性と信頼性が示された。本質問票による安全文化の評価では、病院間比較にとどまらず、病院内の職種毎・職位毎・部署毎の特徴や違いが識別力高く把握できた。本質問票で、安全文化を定量評価することで、組織文化の特徴の理解を深め、医療安全推進するための改善点を把握できることが示唆された。</p> <p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p><u>背景・目的</u> 病院の安全文化は、医療安全確保の観点から関心を集めてきた。病院は複雑な組織構成であるため、安全文化は、病院毎だけでなく院内のサブグループ毎の違いにも着目されるべきである。本研究では、病院、職種、職位、部署等のサブグループ間の安全文化の違いに対する識別力を持つ「病院安全文化の評価尺度」を開発することを目的とした。</p> <p><u>方法</u> 62の先行研究の内容分析を経て、概念的枠組み（8軸64項目）を設定した。医療従事者による内容妥当性の検討、パイロット調査を経て、8軸25項目の質問票を作成した。6公立病院の医療従事者等3304人を対象とし、開発した質問票を用いて安全文化調査を実施した。回答を用いて、質問票の妥当性、信頼性、識別力を確認した。</p> <p><u>結果・考察</u> 2924人からの回答を用い、質問票の構成概念妥当性、基準関連妥当性、内的整合性、信頼性を確認し、最終的には8軸24項目とした。各集団における安全文化8軸のスコアの変動係数（標準偏差／平均）と四分位範囲／平均から、識別力が確認できた。</p> <p><u>結論</u> 本質問票で、安全文化を定量評価することで、組織文化の特徴の理解を深め、医療安全推進の基盤を把握できることが示唆された。</p> <p>以上の研究は、信頼性、妥当性、識別力の高い評価尺度を開発し、本質問票で調査を実施した病院の安全文化の特徴や改善点の理解に貢献し、医療安全の推進に寄与するところが多い。</p> <p>したがって、本論文は博士（社会健康医学）の学位論文として価値あるものと認める。</p> <p>なお、本学位授与申請者は、平成28年1月7日実施の論文内容とそれに関連した研究分野並びに学識確認のための試問を受け、合格と認められたものである。</p>			
要旨公開可能日： 年 月 日以降			